

2022 新競技規則変更（2022 年 7 月 1 日 IHF 施行）に係る解釈の追加について

2022 年 3 月 1 日 IHF 通知

2022 年 3 月 17 日 JHA 通知

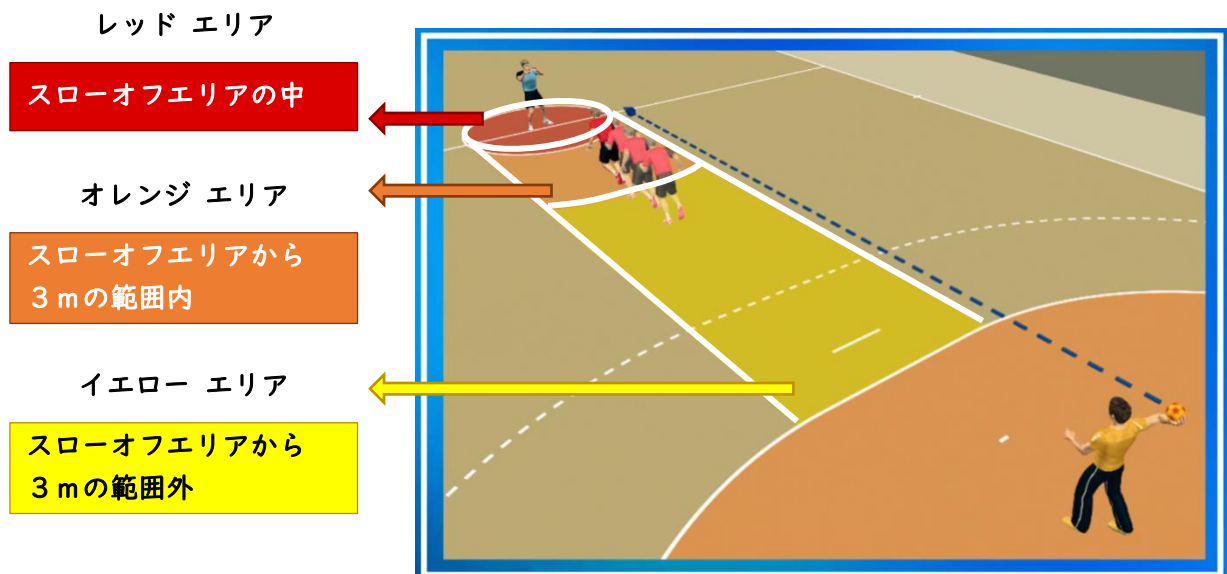
2023 年 7 月 18 日 JHA 追加通知

（公財）日本ハンドボール協会 競技・審判本部
競技規則研究専門委員会

2022 年 7 月 1 日に施行となった競技規則に関し、国際ハンドボール連盟（IHF）競技規則審判委員会（PRC）は、2023 年 7 月 1 日、スローオフエリアに関する新たな解釈の追加を発表しました。追加された解釈の内容は、以下の 2 点となります。

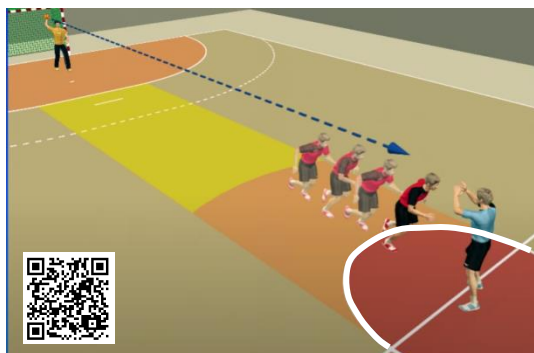
- 1) ゴールエリアからスローオフエリアに向かうゾーンを 3 つに分けて、競技規則を運用する際の判断基準とする
- 2) 1) を基に、帰陣するプレイヤーの位置や動きが、罰則を適用するかどうかの判断基準となる

1) ゴールエリアからスローオフエリアに向かうゾーンを 3 つに分けて、競技規則を運用する際の判断基準とする



このゾーンの区分けと考え方、罰則の適用の有無は、次の通りとなる。

■ レッドエリアおよびオレンジエリア



<レッドエリア>



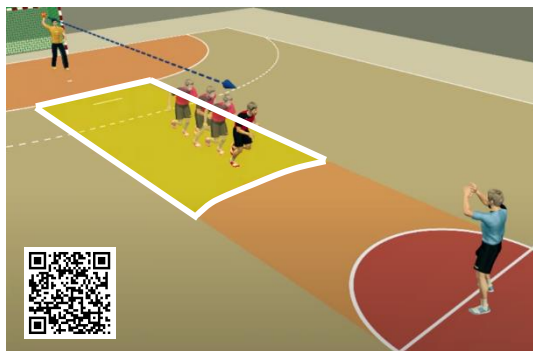
<オレンジエリア>

もしも DF にボールが当たる、もしくは DF がスローの実施を妨害した場合、レフェリーは、**即座の2分間退場**とする。

《この2つのエリアについて、考え方はこれまで通りである。》

- ・スローを行うプレイヤーの味方のプレイヤーからスローを行うプレイヤーに向けて投げられたボールに当たったか当たっていないかに関わらず、DF は、このエリアにおいて**スローの実施を妨害しない責任**がある。
- ・スローの実施の**妨害**とは、ボールに当たるほか、スローオフエリアへ移動するプレイヤーやスローの実施のためにボールを受け取ろうとしているプレイヤーを**ブロックする**などによりスローオフを遅らせることも含まれる。

■ イエローエリア



DF が**直接自陣ゴールの方へ**と向かって走っている最中に、

- (1) **積極的でなく、むしろボールを回避しながらの帰陣が明らかな状況**において、このエリアの中で背中などにボールが当たったとしても、**罰則は適用されない**。
- (2) DF が**積極的な妨害**をした場合（例えば、わざとボールを意図的に止める）に限り、このエリアにおいても**罰則を適用する**。

2) 帰陣するプレイヤーの位置や動きが、罰則を適用するかどうかの判断基準となる



全てのゾーンに共通するものであり、DFがゾーンを横切って帰陣する際に、

- ・ 積極的にスローの実施を妨害した

ことに加えて、

- ・ 積極的にボールを避けようとしていない
DFが、ゾーンを横切ったことでボールと接触、またはスローの実施を妨害した
(この妨害がなければ、スローの実施が可能であったとレフェリーが判断できる)

ならば、スローの実施を妨害したDFに対して、**即座の2分間退場**とする。



< 今回の解釈追加のねらい >

2022年3月以降の通知において、スローオフエリアの設置は、

- ・ スローオフは、スローオフエリアの中から、**必ず**実施される
- ・ スローが完了するまで、DFがこのエリアには侵入できないことを明確に示している
- ・ 競技が中断している際にDFが、相手チームのスローオフの実施を**積極的に妨害することは、どの場所からであっても決して許されない行為**である
- ・ 防御側チームは、相手チームのゴールキーパーがスローオフエリアに向かってボールを投げる**ゾーンを横切ることのリスクを理解**する

を示していることを伝えてきた。

新競技規則により、スローオフエリアを設置することで、走りながらスローオフが実施できるようになり、よりスピーディーな展開、更なるハンドボールの魅力を引き出すことにつながることを目指した。しかし、この保障を「相手チームを減らす」ために活用する行為が見られるのも事実である。

スローを実施する側（スローを行うプレイヤー）が、相手を減らすことを目的に

- ・ 得点を決めたプレイヤーがエリアの中で起き上がった直後に、GKが相手プレイヤーの背中にボールをわざとぶつける
- ・ ガッツポーズなど単に喜びを表現し帰陣するプレイヤーの手を明らかに狙って、ボールをぶつける
- ・ GKが意図しなくても、放り投げたボールが、たまたま自陣ゴールに向けて走り始めた相手プレイヤーの背中に当たる

などの事象が見受けられ、これに関する明確な判断基準がないことから、DF側が意図的ではなかった事象（例えば、上記例の3つ目のように結果的にスローオフを妨害してしまった事象）においても、レフェリーは、即座の2分間退場を判定していた。

そのためIHFは、今回、ゴールからスローオフエリアに向かうゾーンを以下の3つのエリアに分けることで、

- ・ OFへのスローオフ実施の保障
- ・ DFに対するこのゾーンを使用した帰陣におけるリスクと回避義務（得点後の帰陣の際にボールの軌道に走り込まない責任がある）

に加えて、

- ・ OF（特にGKからのスロー）のスポーツマンシップの遵守
- ・ OFに対する相手の安心、安全へ考慮した行為の促し
- ・ 特に、イエローエリアはスローの実施位置から3m以上の距離があり、OF、DF双方が使用できるエリアである

といった、OF側、DF側の双方が遵守すべきことを明確に示している。

特に、OF側が、

- わざとボールをぶつける
- スローを出す味方のプレイヤーがボールの先に誰もいないにもかかわらず、DFがエリアの中を通過して帰陣しているからと、わざとボールを持つ手をDFに当てる

というスポーツマンシップに反する行為を躊躇することなく行っては、ハンドボールの発展は望めないといっても過言ではない。

IHFでも、今回、このような行為を行うOFに対して、以下のガイドラインを示しており、国内においても、レフェリー、チーム、コーチ、プレーヤーなど**ハンドボールに携わる全ての方へのメッセージとして**、ここに掲載する。

IHF ガイドライン

スローを行うプレーヤーが、相手にボールをぶつけるなどのスポーツマンシップに反する行為を行ったのが…

1) レフェリーがスローオフの笛を吹いた後

- 再開方法：**相手チームのフリースロー**
- スポーツマンシップに反する行為を行った**スロアーを即座の2分間退場**とする

2) レフェリーのスローオフの笛が吹かれる前

- 再開方法：**スローオフ**
- スポーツマンシップに反する行為を行った**スロアーを即座の2分間退場**とする



<最後に>

本通達に関し「小学生・クラブチーム」においては、「得点後は、得点をされたチームのゴールキーパーが、レフェリーの笛の後にゴールキーパーズローを行うことによって競技再開（Jクイック方式）」となるため、今回の解釈追加について適用はありません。

（公財）日本ハンドボール協会競技・審判本部では、**本通達の適用時期については、令和5年（2023年）9月1日から**とします。**それ以前の大会については、各連盟・大会主催団体の判断に任せる**こととします。**各連盟の通達や大会主催団体の大会要項をご確認ください。**

なお、本通達に掲載している QRコードは、IHFより展開されている関連動画となります。動画は英語版とはなりますが、併せてご活用ください。

本件に関するご質問については、**各所属の審判長を通して**、日本協会審判本部へ集約していきまします。個別でのお問い合わせは、ご遠慮ください。ご理解とご協力の程よろしく願い申し上げます。